只見短歌会　令和四年六月詠草

葉桜のそよぐ石垣しば桜甘きかをりにしばし佇む　関谷登美子

ひと冬を共に過せし友の声聞けば電話も自ずとはずむ　馬場　八智

逝きて久し姑（はは）の名も消さず我の名を書き添へ備ふる二本の杖を　目黒　富子

母の日の荷造り多く漸くに終へて見上ぐる樹々の葉青し　新国由紀子

「加齢です」と診察されて落ち込むも我が身の不調何時まで続く　渡部ヨリ子

たまに行く施設入所の朋（とも）らみてしみじみ思ふわれの仕合わせ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月定例会

日高俊平太　指導

若葉風水面を渡る波の舟　紺青

人散りて葉桜の下深呼吸　信

村中のあぜ道刈られ梅雨に入る　恒夫

ねぎ坊主親の名前をまず聞いて　都

トンネルの切れ目きれめに青葉山　礼

降り立つや無人駅舎は青田中　一穂

酒好きの義弟に供う山清水　味代子

卓上の流しソーメン子のホーク　修一

夏霧や孫と骨上げなお熱き　真理子

夏用のバッグ残して逝きし人　